

機関番号：32627

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20530642

研究課題名（和文） 広汎性発達障害児を対象とした精神分析的アプローチによる  
治療効果の判定について研究課題名（英文） The Research on the Judgment of the Psychoanalytic Approach to the  
Children with Pervasive Developmental Disorder

研究代表者

木部 則雄 (KIBE NORIO)

白百合女子大学・文学部・教授

研究者番号：10338569

研究成果の概要（和文）：

各症例のケースレポートからは、自他未分化の空想から分化に向かうプロセスが報告されている。治療者との間で付着同一化から投影同一化といった転移関係の変遷が認められた。そうした転移関係において、精神分析技法である直面化や解釈を行うことにより、現実的な体験のインパクトをクライアント自身が象徴的な方法で表現できる能力が高まった。そうしたインパクトに伴う不安や混乱を自身のなかに納めていく心的機能が高まるにつれ、パニックの減少や適応面の向上、集団参加が可能となる変化が認められた。

研究成果の概要（英文）：

The Research on the Judgment of the Psychoanalytic Approach to the Children with Pervasive Developmental Disorder

We had worked with the six children with pervasive developmental disorder in the psychoanalytical psychotherapy a week for three years.

The process where it had faced the differentiation from the imagination of the oneself and others un-differentiation is reported from each case's case.

We found the transition of the transference relationship from the adhesive identification to projection identification.

In such a transference relationship, the children had gained the ability to be expressible of a realistic experience with a symbolical method by facing the psychoanalysis technique, such as confrontation and interpretation.

The change that a decrease in the panic and the improvement and the participation in group on the adjustment side became possible was admitted, as such children had acquired a mental function to pay uneasiness and confusion according to such an impact to own average.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：アセスメント、児童期、心理療法、発達障害、精神分析

## 1. 研究開始当初の背景

近年、アスペルガー症候群やADHDなど、知的障害を伴わない発達障害に関心が集まっている。これまで見過ごされてきた問題に光明が見出され、学校や地域で心理的援助や福祉サービスを受けられる機会が増えてきている。しかし、実際の臨床現場では、DSM-IVに代表される操作的診断による理解が専門家間で共有されており、症状の背景にある個別的な理解には至っていないケースが多く見受けられる。

広汎性発達障害への関心の高まりの背景は、文部科学省（2004）が普通学級の児童の6%あまりがいわゆる軽度発達障害であると報告し、そうした児童への支援を開始したこと、不登校やひきこもりなど思春期や青年期に見られる不適応行動の背景に発達障害が存在する症例が報告され始めたこと（福田，2007）等が挙げられる。また、発達障害への関心は児童期にとどまらず、成人期の発達障害の治療やアセスメントという視点にまで広がっている。衣笠（2007）は、広島市立精神保健センターを受診する成人患者の中に、背景に軽度の高機能型の発達障害が存在しており、その割合は平成10年度に受診者の3%であったが、15年度には30%にまで増加していると指摘している。

こうした中、児童精神医学で用いられるDSM-IV-TR、ICD-10などの症状、行動からのみ診断する操作的診断基準が汎用され、臨床心理学領域にも強い影響を及ぼしている。

しかし、ここには子ども自身の心的世界、家族力動などの力動的視点を欠いているために、一部の専門家は問題行動がすべて発達障害に起因すると誤って理解し、十分な吟味もなしに発達障害の烙印を押してしまうことが散見されている。以上のことから、心理アセスメントは子ども、両親等の家族にとって、子どもの問題行動や発達の問題の本質的な理解において重要なものであり、本研究は広汎性発達障害という過剰診断に警鐘を鳴らすものである。

## 2. 研究の目的

近年、発達障害、特に広汎性発達障害、およびその拡大概念である自閉症スペクトラムが注目されている。小学校では、こうした児童による学級運営が妨げられたり、時には学級崩壊に至る原因と捉えられることがある。このため、通級制度、特別支援教育などの従来の学校組織を改変せざるを得ないような状況に陥っている。また、思春期以後では、広汎性発達障害者の理解しがたい犯罪が新聞紙面等を賑わせている。本研究は、アスペルガー障害、自閉症スペクトラムを含む広汎性発達障害児を研究対象とし、我が国で学術的に試みられたことのない英国の精神分析的アプローチに基づき、子どもの心理アセスメントを定式化し、それに続く精神分析的な心理療法の有効性について検証することを目的とする。

### 3. 研究の方法

①各ケースに対し、英国の精神分析療法の技法に従って、心理療法を行った。原則的に毎週1回の面接を行った。面接ごとに逐語記録を起し、検討を繰り返す。

また、保護者に対し、継続的に3ヶ月から半年に1回の半構造化面接を行い、子どもの現実的な適応を含めた状況を確認する。

研究開始当初から継続していた6ケースについて、月1回、研究協力者全員が参加し、ケース検討および評価を重ねてきた。6症例は、他機関において、広汎性発達障害、自閉症、発達障害のいずれかの診断を受けている。それぞれは、特徴は異なるものの、プレイセラピーのなかで表現される世界は附着同一化や対象との融合といった自閉的な様相を帯びているものである。一方、家庭環境や適応レベルは各症例ごとに異なるものであり、ケースに応じたケースワークが適宜取り入れられた。

本研究では、この6症例について、詳細なケースレポートをまとめ、広汎性発達障害への精神分析的アプローチの治療効果について検討した。

なお、保護者への半構造化面接の主たる担当者は木部が行った。また、精神分析的心理学と事例呈示を臨床心理士に研究補助として依頼した。

②精神分析的心理学の広汎性発達障害児への適応の理論的背景となる『Invisible Boundaries –Psychosis and Autism in Child and Adolescent–』（2005 Karnac）の翻訳作業を行い、広汎性発達障害児への精神分析療法に対する科学的評価への資料にするとともに、見解を深め、啓蒙活動を行な

う。

### 4. 研究成果

①各症例の精神分析的心理学の詳細なケースレポートからは、自他未分化の空想から分化に向かうプロセスが報告されている。自他の分化が達成されるにつれ、治療者との間で附着同一化から投影同一化といった転移関係の変遷が認められている。

そうした転移関係を直面化や解釈といった精神分析技法でもって治療者—クライアント関係のなかで取り扱うことにより、現実的な体験のインパクトをクライアント自身が象徴的な方法で表現できる能力が高まり、そうしたインパクトに伴う不安や混乱を自身のなかに納めていく心的機能が認められた。結果的には、パニックに陥ることが少なくなったり、学校や家庭での適応があがり、集団参加が可能となる変化が認められた。だが一方で、そうした不安、混乱が、治療の進展に伴い表現されるようになった段階で、家庭での子どもの管理や対応が困難となり、中断せざるを得なかった症例もあり、家庭へのコンサルテーションや治療者側の連携の取り方については再考する必要があるだろう。また、思春期に移行するケースがあるため、今後も精神分析的アプローチを継続し、子どものパーソナリティの発達や社会適応の経過を追っていく必要があり、今後の課題である。

②また、関連文献として『Invisible Boundaries –Psychosis and Autism in Child and Adolescent–』（2005 Karnac）を翻訳し、『自閉症の精神病展開—精神分析アプローチ』（明石書店）として刊行された。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

① 木部則雄、自閉スペクトラム児への精神分析的アプローチ—出生外傷と母子一体化空想の観点から—、白百合女子大学発達臨床センター紀要、査読無し、第13巻、2010、pp19 - 31

② 木部則雄、アスペルガー障害の芸術的創造性、白百合女子大学研究紀要、査読無し、45巻、2009、pp105-129

[学会発表] (計2件)

① 熊田知佳、アスペルガー障害児のプレイセラピーの展開、日本精神分析学会、平成21年11月6日、大阪国際会議場

② 木部則雄、生まれ出ざる悩み—出産時外傷と発達障害—、日本精神分析的な精神医学会、平成22年3月28日、東京大学

[図書] (計1件)

① 木部則雄・脇谷順子(監訳)、長沼佐代子・五十畑昌子(訳)、Didier Houzel/Maria Rhode(編)、明石書店、『自閉症の精神病への展開』原題: Invisible Boundaries (Karnac Books)、2009、P250

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

木部 則雄 (KIBE NORIO)  
白百合女子大学・文学部・教授  
研究者番号: 10338569

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし